

# 辺野古通信

第51号 2016年5月6日



3/27 新宿デモ



3/25 神奈川集会(関内ホール)

発行: 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座(沖縄講座@横浜)

沖縄講座 HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

埋立て承認は取り消された！政府は「臨時制限区域」を解除せよ！

■政府の「和解案受け入れ」「工事中止」で、昨年 10/13 の翁長知事による仲井真前知事の埋立て承認の取消処分が復活した。日本政府・防衛省は辺野古新基地建設の法的根拠を失うことになったのだ。このことは繰り返し強調する必要がある。ところが沖縄防衛局は 4/30 になってようやく大浦湾のフロート撤去作業を始めたものの、コンクリートブロックも台船もそのまま、臨時制限区域の解除にも応ずる気配もない。法的根拠のないことが堂々とまかり通っているのがこの国の現実だ。■辺野古では、手を緩めることなく、ゲート前座込み行動を継続している。怒りの矛先は在沖米軍全体に向けられ、とうとう極東最大の基地・嘉手納のゲート前抗議行動(毎週金曜日)も始まった。■3/28 に与那国島の陸自沿岸監視隊が発足した。人口 1,500 人弱の島に自衛隊員 160 人、その家族も含め約 250 人が移り住む。着々と進む国境の島々-宮古・八重山諸島の軍事要塞化は、島の人々に沖縄戦の悪夢を蘇らせつつある。軍隊は住民を守らない。陸自ミサイル部隊の配備計画に危機感を募らせる宮古・石垣の住民の会約 10 人が、3/29 の戦争法施行に抗議する国会行動に登場、37000 人の参加者に、国境の島々の自衛隊配備が日米共同使用を前提とした辺野古新基地建設と連動した動きであることに

注意を喚起した。3/30 には防衛省への要請行動も展開し、その夜の緊急集会(京橋プラザホール)には 250 人を超える人々が集まった。■辺野古で「工事中止」に追い込まれた沖縄防衛局は、矛先を変えて、東村・高江のオスプレイパッド建設工事を強行すべく画策を始めた。県道を管理する県に、工事車両の侵入を阻んでいる N1 ゲート前のバリケードや座込みデモ等「妨害物」の撤去指導を強要しようとしている。4 月中旬に高江の住民の会と東村・国頭村・大宜味村の島ぐるみ会議メンバーが大挙して上京、環境省への要請行動を展開した。4/16 の緊急集会(東京・文京区民センター)には 300 人近くの人々が参集、生物多様性豊かな森を守りたい、というヤンバルの人々の切実な訴えに耳を傾けた。言うまでもなく、高江のオスプレイ訓練基地は辺野古新基地と一体のものだ。■沖縄講座も参加する「島ぐるみ会議と神奈川を結ぶ会」は 3/25 講演集会(関内ホール)、4/9 横浜/鶴見の集い(鶴見沖縄県人会館)を成功させた(報告は結ぶ会ニュース第 4 号参照)。5 月は 2 回目の辺野古座込みツアーを準備中。沖縄講座としても 6 月に辺野古現地に向かう予定だ。引き続き、辺野古に行こう！ ■辺野古・高江カンパは累計 1,900,289 円(5 月 5 日現在)。引続きカンパを！ 郵振 00210-0-2021 沖縄連続講座

沖縄「日本復帰 44 年」を問う！ 5.15 新宿デモへ！

5 月 15 日(日)午後 2 時新宿駅東口アルタ前

- 発言 玉城 愛さん (SEALDs 琉球、島ぐるみ会議・名護共同代表)  
\*名護市内にある名桜大学 4 年生、沖縄・うるま市出身
- デモ 午後 3 時から新宿駅周辺をデモ行進します。
- 主催 沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック

# 3/25~27、山城博治さん首都圏を駆け巡る！

3月25日(金)、26日(土)、27日(日)の3日間、キャンプシュワブ・ゲート前の「ミスター・シュプレヒコール」、沖縄平和運動センター議長・山城博治さんが、首都圏を駆け巡った。



最初に登場したのは、3月25日(金)夜の横浜市・関内ホール・小ホールで開かれた「辺野古の埋立てを止めよう！沖縄と神奈川を結ぶ 3.25 講演集会」。「島ぐるみ会議と神奈川を結ぶ会」「神奈川平和運動センター」「基地撤去をめざす県央共闘会議」の三者が共催。山城博治さんが久しぶりに神奈川に登場することもあってか注目度も高く、開場前から長い行列が出来た。小ホールは264席だが、満席となり人が溢れた。



最初の講演に立ったのは、元沖縄タイムス記者でフリー・ジャーナリストの渡辺豪さん。「山城さんの講演を生で聞きたくて来た」という渡辺さん。「昨年春から東京に来て、本土と沖縄の断絶をひしひしとを感じる」と語り、「本土の歪んだ沖縄情報を正していきたい」と強調する渡辺さんの、ジャーナリストとしての真摯な姿勢が、参加者の共感と呼んだ。

続いてお待ちかねの山城博治さん。半年間の闘病生活から復帰して辺野古現地闘争の最前線で連日駆け回る博治さんの登場に、場内割れんばかりの拍手。「毎週末に県外に出て、全国のみなさんに話をしている。辺野古座込みへのお礼と、全国の支援がなければ勝てない、手を結んで怒涛のように襲い来る安倍内閣に立ち向かおう、どこかに橋頭堡を作って、勝利をして、必ずやあの化物のような政治家の企みを跳ね返そう！」いきなり全開だ。「辺野古の現場では、泣きながら、機動隊にごぼう抜きされながら、怪我もして、逮捕もされる。本当になんとかなるのか。そういう議論

もある。しかしみなさん、座り込みをするしかない。いざという時に1,000人、2,000人集まれば工事は何も進まない。そういう闘いをやればいい。やろうじゃないか！」拍手、歓声、指笛が鳴り止まない。「運動がここまで来て、工事を止めた。私たちが揺るがず、疲れた体を癒して、来るべき時に備えて、全国に、世界に呼びかけて、いざという時には大結集する準備をしようではないか！」「辺野古は負けません！辺野古は勝ちます！必ず勝利をして、全国に勇気を届けていきたい。そして生きている希望をみんなで分かち合う、そういう時を迎えたい。」最後に、沖縄のフォーク歌手のまよなかしんやさんが闘病中であることを紹介し「命の海に杭は打たせない」のCDを流して山城さんが歌い始めると、場内大合唱。締めくくりの歌は山城さんが好きという「我が心はやんばるの地に」。高江の深い森が目の前に広がり、そこに息づく生物たちの蠢きを感じる、そんな歌声だ。講演時間60分、あっという間に過ぎた。会場で集めた辺野古派遣カンパも17万円超集まった！



26日(土)の午後、山城さんは代々木公園の脱原発大集会に現れた。35,000人の参加者を前に、「辺野古が完成すれば間違いなく、あのクソツタレ、戦争に走るでしょう。それでいいのか、みなさん！」と激を飛ばすと、大歓声が上がった。



27日(日)の午後、山城さんは新宿駅東口のアルタ前に登場。歩行者天国の大群衆に、沖縄からの熱いメッセージ。約500人で、新宿駅周辺を練り歩いた。



# 「世界史の中の沖縄/辺野古」を巡り議論

4/24、東京・全水道会館にて、「〈反テロ戦争〉に向かう時代に考える—世界史の中の沖縄/辺野古」をテーマにしたシンポジウムが開催され、約100人が参加した。〈4.28〉シンポジウム実行委員会の主催で、九条改憲阻止の会の協賛。2013年から毎年4月28日前後に開催され、本年度で4回目になる。



冒頭、『標的の村』『戦場ぬ止どうみ』の三上智恵監督がブログで公開している10分ほどの映像『先島台風、本土上陸』が上映された。3月下旬の宮古・石垣の自衛隊配備に反対する住民の会の東京行動の記録だ。3月28日に、与那国島の陸樹自衛隊沿岸監視隊（160人）が発足した。宮古・八重山諸島の人々は、国境の島々への自衛隊配備が、辺野古の新基地建設と連動した琉球列島の軍事要塞化の一連の動きであること、それが「国防」の名の下に島々の住民の命と暮らしを脅かす動きであり、沖縄戦の再現であることを敏感に感じ取っている。



シンポジウムでは、田仲康博さん（メディア研究、国際基督教大学教員）、板垣雄三さん（イスラーム研究）、丸川哲史さん（台湾・中国・東アジア研究、明治大学教員）の3人から、テーマに沿って問題提起があった。

沖縄で生まれ育った田仲康博さんは、「挑発的

に言えば、我々すべてがテロリストである」と語り始めた。2001年9月11日のニューヨークの「テロ」直後に在沖米軍基地が最高度の厳戒状態になり、沖縄県警とヤマトから派遣された機動隊が米軍基地を警備、米



兵も銃口を基地の外に向けた。この時、銃口を向けられた沖縄の人々は、沖縄戦の体験を想起した。沖縄戦では、日本軍から沖縄言葉ウチナーグチを話すウチナンチュがスパイとして敵視され、殺害された例もあった。「我々すべてがテロリストである」とはこの事態を指している。田仲さんは、そこから更に踏み込んで、海兵隊基地の中を通る高速自動車道にあった「流れ弾に注意」の看板、米軍の管制空域を避けて超低空飛行で自衛隊と共用の那覇空港に離発着する航空機、2004年の沖国大への米軍ヘリ墜落事故の現場を封鎖した米軍の動き、機動隊と海保、自衛艦

（2006年に自衛艦「ぶんご」が辺野古沖合に登場した）まで出動させて強行される辺野古の新基地建設の現場等々を列挙し、「沖縄こそ〈対テロ戦争〉の現場であり、現在進行形の戦場である」と喝破した。そして「国家から離脱し、非国民になること。国家の喉に突き刺さる刺になることが重要ではないか」と挑発的な問題提起で締めくくった。

田仲さんの発言を受けて板垣雄三さんは、主催者が掲げたシンポジウムのテーマ「〈反テロ戦争〉に向かう時代に考える」という表現に疑義を呈した。戦争法を成立させて伊勢志摩サミットの舞台で



〈反テロ戦争〉に本格参戦宣言しようとしている安倍政権への警戒と批判を強調する表現だが、「西アジアの問題も沖縄の問題も、世界の問題だ。辺野古の状況に現れているように、すでにわれわれはグローバルな〈反テロ戦争〉の真っ只中にいる、という情勢認識こそ重要ではないか」と指摘した。そして「1970年代からイスラエルが



グローバルな〈反テロ戦争〉を始めた。〈反テロ戦争〉は、植民地主義の最後の断末魔であり、社会心理戦争にほかならない」と語り、「あらゆる人が、あらゆる場所で、自分の課題として辺野古を闘い、それぞれの闘いを共有し合うことが重要だ」と強調。〈反テロ戦争〉による「人類共倒れ」から抜け出すための「新しい市民革命」を提唱した。

これまでの〈4.28〉シンポジウムで、東アジア、とりわけ中国との関係で沖縄問題をどう考えるかについて提起してきた丸川哲史さんは、60年安保と2015年安保闘争を比較して論じ、「東アジアの平和を考える時、『立憲主義』と『労働（階級）問題』、『アジアの連帯』が重要なファクターとなる」と指摘し、「2015年から16年にかけて重要課題としてせり上がってきた辺野古問題は、日本内階級格差とも言えるし、基地との関連ではアジア連帯の課題にも繋がる」と指摘した。そして2015年安保闘争の中で「中国脅威論」に対する有効な反論が見られなかったことに注意を喚起した。「アジアの平和を考えた場合に、中国がどういう存在であるかという問いを避けることはできない」「『島』という土壌で考える世界観と中国のような『大陸』では、世界観を作る基礎的なものが違うのではないのか」とも述べ



た。丸川さんによれば、「中国は、南の海と西の内陸を、同時に、相互的に考える」。中国国内に過剰に蓄積された資金と過剰生産物が、大陸と海洋に向かって巨大な流れを作りつつある。「一帯一路構想」はそのひとつの方法だ。そもそも中国は東アジアだけでなく、中央アジア、東南アジアも含んでいる。中国について考えようとすると、「東アジア」という枠を超えざるを得ない。そこで〈反テロ戦争〉とも関連が生じる。丸川さんはそう指摘し、最後に「田仲さん、板垣さんも話されたように、**辺野古で起きていることと、南シナ海、中東や中央アジア、さらにアフリカで起きていることはすべて連動しているものとして分析し、考察せざるを得ないという時代に入ってきているのではないか**」と問題提起した。

大きなテーマで、論点も多岐にわたり、限られた時間の中で充分論じ尽くすことはできなかったが、田仲さん、板垣さん、丸川さんからそれぞれ刺激のかつ挑発的な問題提起がされ、示唆に富むシンポジウムとなった。(雑誌『情況』8・9月号に全記録を掲載予定)

シンポジウム終了後、ヘリ基地反対協共同代表の安次富浩さんからのメッセージ(下掲)が、辺野古現地闘争に何度も駆けつけている学生から読み上げられた。最後に、「伊勢志摩サミットに反対する実行委員会」から、安倍政権が〈反テロ戦争〉への本格参戦を宣言する場として開催される伊勢志摩サミットに反対する取り組みが提起され、17時に散会した

## 「世界史の中の沖縄/辺野古」シンポジウムへのメッセージ

今年の4月12日は日米両政府が「世界で最も危険な基地」と称した普天間飛行場の全面返還合意(1996年)から20年を経過した日である。この20年間はオスプレイ配備問題で鮮明になったように日米両政府に「騙された20年」であった。橋本首相・モンデール駐日米大使会談で「5年ないし7年に返還し、既存の米軍基地にヘリポートを建設する」旨の内容であった。その当時の日本政府の主張は国策と称し「防衛問題は国の専管事項であり、地政学と海兵隊の抑止力」を盾に県内移設を推進し、いつの間にかヘリポートから代替施設へと強引に押し付けてきたのである。

今や、「抑止力」がゆくし(沖縄の言葉で嘘)であり、米政府高官や米軍首脳が「沖縄に固守していない。沖縄を選んだのは日本政府」と発言し、「地政学」も破綻しているのである。あまつさえ、民主党政権末期の森本敏防衛大臣は離任の記者会見で「陸上部隊と航空部隊と、それから支援部隊.....例えば、日本の西半分のどこかに、...沖縄でなくても良いということだと。.....では、政治的にそうなるのかということ、そうならない。.....政治的に許容できるところが沖縄にしかなないので、だから、簡単に言ってしまうと、軍事的には沖縄でなくても良いが、政治的に考えると、沖縄がつまり最適の地域である」と臆面もなく述べた。また、中谷防衛大臣は普天間基地所属のMV-22オスプレイの佐賀空港での離着陸訓練使用問題に関し、佐賀県民の猛反発にあい、「佐賀県民の民意を受けとめる」と佐賀県知事との会談の場で撤回した。このように、沖縄問題の通と称する軍事評論家や政治家たちは平然と沖縄差別を行うのである。

我々は沖縄を売り渡したサンフランシスコ条約の締結日を「主権回復の日」と称して国家行事を行った安倍政権を決して許さない。「危険性の除去」と「辺野古が唯一の解決策」が安倍政権の支柱である。20年間も「世界で一番危険な普天間飛行場」の解決を放置してきた歴代政権の連中に「危険性の除去」と言われる筋合いはない。オスプレイ配備反対の沖縄の民意を無視しておきながら、「普天間の固定化」を脅かしに使う安倍政権。翁長知事との対談で「戦後生まれなので沖縄の歴史はわからない」と口にし、口を開けば「法治国家」と宣(のたま)う菅官房長官。明治以降の沖縄差別政策は現在でも続いているのである。沖縄は日本の固有の領土でないから。我々は来る沖縄県議選挙や参議院選挙でオール沖縄の意志を明確にする。沖縄を再び「戦場(いくさば)」にしないため、自衛隊の配備にも反対していく。

憲法違反の「集団的自衛権の行使」を柱とする戦争法制を廃棄しよう!九州では群発地震が発生し、原発事故の危険性は増している。安倍政権を打倒するため、脱原発や反TPPで闘う市民・農業者と連携して、参議院選挙では1人区統一候補を推進し、勝利しよう!非暴力・抵抗運動によって必ず勝利する。勝利の手を我等に!

2016年4月24日

安次富浩(ヘリ基地反対協共同代表)